

ジャックと豆の木

楠山正雄

青空文庫

むかしむかし、イギリスの大昔、アルフレッド大王の御代のことでございます。ロンドンの都からとおくはなれたいなかのこやに、やもめの女のひとが、ちいさいむすこのジャックをあいてに、さびしくくらししていました。かけがえのないひとりむすこですし、それに、ずいぶんのんきで、ずぼらで、なまけものでしたが、ほんとうは気だてのやさしい子でしたから、母親は、あけてもくれても、ジャック、ジャックといって、それこそ目の中にでも入れてしまいたいくらいにかわいがつて、なんにもしごとはさせず、ただ遊ばせておきました。

こんなふうで、のらくらむすこをかかえた上に、このやもめの人は、どういうものか運がわるくて、年年ものが足りたなくなるばかり、ある年の冬には、もう手まわりの道具や衣い類るいまで売って、手に入れたおかねも、手内職てないしよくなんかして、わずかばかりかせぎためたおかねも、きれいにつかかってしまって、とうとう、うちの中で、どうにかおかねになるものといったは、たった一ぴきのこった牝牛めうしだけになってしまいました。

そこで、ある日、母親は、ジャックをよんで、

「ほんとうに、おかあさんは、自分のからだを半分もって行かれるほどつらいけれど、よいよ、あの牝牛を、手ばなさなければならぬことになったのだよ。おまえ、ごくろうだけれど、市場いちばまで牛をつれて行って、いいひとをみつけて、なるたけたかく売って来ておくれな。」といいました。

そこで、ジャックは、牛をひっぱって出かけました。

しばらくあるいて行くと、むこうから、肉屋の親方がやって来ました。

「これこれ坊や、牝牛なんかひっぱって、どこへ行くのだい。」と、親方は声をかけました。

「売りに行くんだよ。」と、ジャックはこたえました。

「ふうん。」と、親方はいいながら、片手にもった帽子をふってみせました。がさがさ音がするので、気がついて、ジャックが、帽子のなかを、ふとのぞいてみますと、きみような形をした豆が、袋の中から、ちらちらみえました。

「やあ、きれいな豆だなあ。」

そうジャックはおもって、なんだか、むやみとそれがほしくなりました。そのようすを、

相手の男は、すぐと見つけてしまいました。そして、このすこしたりないこどもを、うま
くひっかけてやろうとおもって、わぎと袋の口くちをあけてみせて、

「坊ぼうや、これがほしいんだろう。」といいました。

ジャツクは、そういわれて、大にこにこになると、親方はもったいらしく首をふって、
「いけない、いけない、こりやあふしぎな、魔法の豆まさ。どうして、ただではあげられな
い。どうだ、その牝牛と、とりかえっこしようかね。」といいました。

ジャツクは、その男のいうなりに、牝牛と豆の袋ととりかえっこしました。そして、お
たがい、これはとんだもうけものをしたとおもって、ほくほくしながら、わかれました。

ジャツクは、豆の袋をかかえて、うちまでとんでかえりました。うちへはいるか、はい
らないに、ジャツクは、

「おかあさん、きょうはほんとに、うまく行ったよ。」と、いきなりそういつて、だいと
くいで、牛と豆のとりかえっこした話をしました。ところが、母親は、それをきいてよろ
こぶどころか、あべこべにひどくしかりました。

「まあ、なんというばかなことをしてくれたのだね。ほんとにあきれてしまう。こんなつ
まらない、えんどう豆の袋なんかにつられて、だいじな牝牛一ぴき、もとも子もなくして

しまうなんて、神さま、まあ、このばかな子をどうしましょう。」

母親はぶんぶんおこって、いまいましそうに、窓のそとへ、袋の中の豆をのこらず、なげすててしまいました。そして、つくづくなさけなさそうに、しくんしくん、泣きだしました。

きつとよろこんでもらえるとおもっていると、あべこべに、うまれてはじめて、おかあさんのこんなにおこった顔を見たので、ジャックはびっくりして、じぶんもかなしくなりました。そして、なんにもたべるものがないので、おなかのすいたまま、その晩ははやくから、ころんとねてしまいました。

そのあくる朝、ジャックは目をさまして、もう夜があけたのに、なんだかくらいなともつて、ふと窓のそとをみました。するとどうでしょう、きのう庭になげすてた豆の種子たねから、芽が生えて、ひと晩のうちに、ふとい、じょうぶそうな豆の大木が、みあげるほどたくくのびて、それこそ庭いっぱい、うっそうとしげっているではありませんか。

びっくりしてとびおきて、すぐと庭へおりてみますと、どうして、たかいといつて、豆の木は、それこそほうずのしれないたかさに、空の上までものびていました。つると葉とがからみあって、それは、空の中をどんとつきぬけて、まるで豆の木のはしごのように、

しつかりと立っていました。

「あれをつたわって、てっぺんまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」
そうおもって、ジャックは、すぐとはしごをのぼりはじめました。だんだんのぼって行くうち、ジャックの家は、ずんずん、ずんずん、目の下でちいさくなって行きました。そしていつのまにかみえなくなってしまうました。それでもまだてっぺんには来ていませんでした。ジャックは、いったいどこまで行くのかとおもって、すこしきみがわるくなりました。それでもいっしょうけんめい、はしごにしがみついて、のぼって行きました。あんまりたかくのぼって、目はくらむし、手も足もくたびれきって、もうしびれて、ふらふらになりかけたころ、やっとてっぺんにのぼりつきました。

二

ジャックは、そのとき、まずそこらを見まわしました。すると、そこはふしぎな国で、青あおとしげった、しずかな森がありました。うつくしい花のさいている草原もありました。水^{すいしやう}晶^{しょう}のようにきれいな水のながれている川もありました。こんなたかい空の上に、

こんなきれいな国があるうとは、おもってもいませんでしたから、ジャックはあつけにとられて、ただきよとんとしてしまいました。

いつもまにか、ふと、赤い角かくずきんをかぶった、みような顔のおばあさんが、どこから出て来たか、ふと目の前にあらわれしました。ジャックは、ふしぎそうに、このみような顔をしたおばあさんを見つめました。おばあさんは、でも、やさしい声でいいました。

「そんなにびつくりしないでもいいのだよ。わたしはいつたい、お前さんたち一家いっかのものを守ってあげている妖よう女じよなのだけれど、この五、六年のあいだというものは、わるい魔まもののために、魔法まほうでしばらくいられていて、お前さんたちをたすけてあげることができなかつたのさ。だが、こんどやつと魔法がとけたから、これからはおもいのままに、助たすけてあげられるだろうよ。」

だしぬけに、こんなことをいわれて、ジャックは、なおさらあつけにとられてしまいました。そのぼかんとした顔を、妖女はおもしろそうにながめながら、そのわけをくわしく話しました。それをかいつまんでいうと、まあこんなものでした。

「ここからそうとおくはない所に、おそろしい鬼の大男が、すみかにしている、お城のよ
うな家がある。じつはその鬼が、むかし、そのお城に住んでいたお前のおとうさんをころ

して、城といっしょに、そのもっていたおたからのこらずとってしまったものだから、お前のうちは、すっかり貧乏びんぼうになってしまったのさ。そうしてお前も、赤ちゃんるときから、かわいそうに、お前のおかあさんのふところにだかれたまま、下界げかいにおちぶれて、なさないくらしをするようになったのだよ。だから、もういちど、そのたからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめにあわしてやるのが、お前のやくめなのだよ。」

こういうふうにいきかされると、ぐうたらなジャックのこころも、ぴんと張はってききました。知らないおとうさんのことが、なつかしくなつて、どうしてもこの鬼をこらしめて、かすめられたたからを、とりかえさなくてはならないとおもいました。そうおもつて、とてもいさましい気になつて、おなかのすいていることも、くたびれていることも、きれいにわすれてしまいました。そこで、妖女にお礼をいってわかれますと、さっそく、鬼の住んでいるお城にむかつて、いそいで行きました。

やがて、お日さまが西にしずむころ、ジャックは、なるほどお城のように大きな家の前に来ました。

まず、とんとんと門をたたくと、なかから、目のひとつしかない、鬼のお上かみさんが出て来ました。きみのわるい顔に似合にあわず、鬼のお上さんは、ジャックのひもじそうなようす

をみて、かわいそうにおもいました。それで、さもこまったように首をふって、

「いけない、いけない。きのどくだけれど、とめてあげることとはできないよ。ここは、人くい鬼のうちだから、みつかるよ、晩のごはんのかわりに、すぐたべられてしまうからね。」といいました。

「どうか、おばさん、知れないようにしてとめてくださいよ。ぼく、もうくたびれて、ひと足もあるけないんです。」と、たのむように、ジャックはいいました。

「しかたのない子だね。じゃあ今夜だけとめてあげるから、朝になったら、すぐおかえりよ。」

こういつているさいちゆう、にわかにならずしん、ずしん、地ひびきするほど大きな足音がきこえて来ました。それは主人の人くい鬼が、もう、そこからかえって来たのです。鬼のお上さんは、大あわてにあわてて、ジャックを、だんろの中にかくしてしまいました。

鬼は、へやの中にはいると、いきなり、ふうと鼻をならしながら、たれだつてびっくりしてふるえ上がるような大ごえで、

「フン、フン、フン、

イギリス人の香かがするぞ。

生きていようが死んでよが、

骨ごとひいてパンにしよぞ。」

と、いいました。すると、お上さんが、

「いいえ、それはあなたが、つかまえて、土の牢ろうに入れてあるひとたちの、においでしよ
う。」といいました。

けれど鬼の大男は、まだきよろきよろそこらを見まわして、鼻をくくんくんやっています
た。でも、どうしても、ジャックをみつけることができませんでした。

とうとうあきらめて、鬼は、椅子いすの上に腰こしをおろしました。そしてががつ、がぶがぶ、
たべたりのんだりしはじめました。そつとジャックがのぞいてみますと、それはあと
からあとから、いつおしまいになるかとおもうほどかっこむので、ジャックは、目ばかり
まるくしていました。さて、たらふくたべてのんだあげく、お上さんに、

「おい、にわとりをつれてこい。」といいつけました。

それは、ふしぎなめんどりでした。テーブルの上ののせて、鬼が、

「生め。」といますと、すぐ金のたまごをひとつ生みました。鬼がまた、「生め。」といますと、またひとつ、金のたまごを生みました。

「やあ、ずいぶん、とくなにわとりだな。おとうさんのおたからというのは、きつとこれにちがいない。」と、下からそつとながめながら、ジャックはそうおもいました。

鬼はおもしろがって、あとからあとから、いくつもいくつも、金のたまごを生ましているうち、おながはつてねむたくなつたとみえて、ぐすぐすと壁かべのうごくほどすごい大いびきを立てながら、ぐつすりねこんでしまいました。

ジャックは、鬼のすつかりねむつたのを見すまして、ちようと鬼のお上さんが、台所へ行っているのをさいわい、そつとだんろの中からぬけだしました。そして、テーブルの上のめんどりを、ちよろり小わきにかかえて、すたこらお城を出て行きました。

それから、どんどん、どんどん、かけだして行って、豆の木のはしごのかかっている所までくると、するするとつたわつておりて、うちへかえりました。

ジャックのおかあさんは、むすこが、鬼か魔女にでもとられたのではないかと心配していますと、ぶじでひよっこりかえつて来たので、とても大きわぎしてよろこびました。それから、ジャックのもつてかえつた、金のたまごを生むにわとりのおかげで、おや子は

お金もちにもなりましたし、しあわせにもなりました。

三

しばらくすると、ジャックはまた、もういちど空の上のお城に行ってみたくなりました。そこで、こんどは、すっかり先^{せん}とちがったふうをして、ある日、豆の木のはしごを、またするするとのぼって行きました。鬼のお城に行つて、門をたたくと、鬼のお上さんが出てきました。ジャックが、またかなしそうに、とめてもらいたいといつて、たのみますとお上さんは、まさかジャックとは気がつかないようでしたが、それでも手をふつて、

「いけない、いけない。この前も、お前とおなじような貧乏たらしいこどもをとめて、主人のだいじなにわとりを、ちよつくらもつて行かれた。それからはいまい晩、そのことをいだして、わたしが、しかられどおし、しかられているじゃないか。またもあんなひどいめにあうのはこりこりだよ。」といました。

それでも、ジャックは、しつっこくたのんで、とうとう中へ入れてもらいました。するうち、大男がかえつて来て、また、そこらをくんくんかいでまわりましたが、ジャックは、

あかがねの箱の中にかくれているので、どうしてもみつかりませんでした。

大男は、この前とおなじように、晩ばんの食事をたらふくやったあとで、こんどは、金のたまごをうむにわたりの代りに、金や銀のおたからのたくさんつまった袋を出させて、それをぎあつとテーブルの上にあけて、一枚一枚かぞえてみて、それから、おはじきでもしてあそぶように、それをチャラチャラいわせて、さんざんあそんでいましたが、ひととおりのしむと、また袋の中に戻って、ひもをかたくしめました。そして、天井にひびくほどの大あくび、ひとつして、それなりぐうぐう、大いびきでねてしまいました。

そこで、こんども、ジャックは、そろりそろり、あかがねの箱からはいだして、金と銀のおたからのいっぱいつまった袋を、両方の腕に、しっかりかかえるがはやいか、さっさとにげだして行きました。ところが、この袋の番人に、一ぴきの小犬がつけてあったので、そいつが、とたんに、きやんきやん吠ほえだしました。

ジャックは、こんどこそだめだとおもいました。それでも、大男は、とても死んだようによくね入っていて、目をさましませんでした。ジャックはむちゆうで、あとをもみずにごんごん、ごんごん、かけて行って、とうとう豆の木のはしごに行きつきました。

さて、にわとりとちがつて、こんどはおもたい金と銀の袋をはこぶのに、ほねがおれま

した。それでもがまんして、うんすら、うんすら、ふつかがかりで、豆の木のはしごを、ジャツクはおりました。

やつとこさ、うちまでたどりつくつと、おかあさんは、ジャツクがいなくなったので、すっかり、がっかりして、ひどい病人になって、戸をしめてねていました。それでも、ぶじなジャツクの顔をみると、まるで死んだ人が生きかえったようになって、それからずんずんよくなって、やがて、しやしんあるきだしました。その上、お金がたくさんできたときいて、よけいげんきになりました。

四

こうして、またしばらくの間、ジャツクは、うちで、おとなしくしていました。するうち、だんだん、からだじゆう、むずむずして来ました。もうまた天^{てんじょう}上したくなくて、まいにち、豆の木のはしごばかりながめていました。するとそれが気になって、気になつて、気がふさいで来ました。

そこで、ジャツクは、ある日また、そつと豆の木のはしごをつたわつてのぼりました。

こんども顔から姿から、すっかりほかのこどもになって行きましたから、鬼のお上さんは、まただまされて、中に入れました。そして、大男がかえると、あわてて、お釜かまのなかにかくしてくれました。

鬼の大男は、へやの中じゆうかぎまわって、ふん、ふん、人くさいぞいいました。そして、こんどは、なんでもさがしだしてやるといって、へや中のものを、ひとつひとつみてまわりました。そしてさいごに、ジャックのかくれているお釜のふたに手をかけました。ジャックは、ああ、こんどこそだめだとおもって、ふるえていますと、それこそ妖女がまもつていてくれるのでしょうか、大男は、ふと気がかわって、それなりろばたにすわりこんで、

「まあいいや。はらがすいた。晩飯にしようよ。」といいました。

さて、晩飯がすむと、大男はお上さんに、

「にわとりはとられる、金の袋、銀の袋はぬすまれる、しかたがない、こん夜やはハーブでもならすかな。」といいました。

ジャックが、そつとお釜のふたをあけてのぞいてみますと、玉でかぎった、みごとなハーブのたて琴こが目にはいりました。

鬼の大男は、ハープをテーブルの上ののせて、

「なりだせ。」といいました。

すると、ハープは、ひとりでになりました。しかもその音のうつくしいことといつたら、どんな楽器がっきだって、とてもこれだけの音にはひびかないほどでしたから、ジャックは、金のたまごのにわとりよりも、金と銀とのいっばいつまった袋よりも、もつともつと、このハープがほしくなりました。

するうち、ハープの音楽を、たのしい子守うたにして、さすがの鬼が、いい心もちにねむってしまいました。ジャックは、しめたとおもって、そつとお釜の中からぬけだすと、すばやくハープをかかえてにげだしました。ところが、あいにく、このハープには、魔法がしかけてあつて、とたんに、大きな声で、

「おきろよ、だんなさん、おきろよ、だんなさん。」と、どなりました。

これで、大男も目をさましました。むうんと立ち上がってみると、ちっぽけな小僧が、大きなハープを、やつこらさとかかえて、にげて行くのがみえました。

「待て小僧、きさま、にわつとりをぬすんで、金の袋、銀の袋をぬすんで、こんどはハープまでぬすむのかあ。」と、大男はわめきながら、あとを追っかけました。

「つかまるならつかまえてみる。」

ジャックは、まけずにどなりながら、それでもいっしょうけんめいかけました。大男も、お酒によった足をふみしめふみしめ、よたよたはしりました。そのあいだ、ハーブは、たえず、からんからん、なりつつづけました。

やっとこさと、豆の木のはしごの所までくると、ジャックは、ハーブにむかって、

「もうやめろ。」といいますと、それなりハーブはだまりました。ジャックは、ハーブをかかえて、豆の木のはしごをおりはじめました。はるか目の下に、おかあさんが、こやの前立って、泣きはらした目で、空をみつめていました。

そうこうするうち、大男が追っついてきて、もう片足、はしごにかけました。

「おかあさん、お泣きでない。」と、ジャックは、上からせいっぱいよびました。

「それよか、斧おのをもつてきておくれ。はやく、はやく。」

もう一分もまたれません。大男はみしり、みしり、はしごをつたわって来ます。ジャックは、気が気ではありません、身のかるいのをさいわいに、ハーブをかかえたなり、はしごの途とちゆう中、つばめのようなはやわぎで、くるりとひっくりかえって、たかい上からとびおりました。そこへおかあさんが、斧をもつてかけつけたので、ジャックは斧をふるって、

いきなり、はしごの根もとから、ぷつぷり切りはなしました。そのとき、まだ、はしごの中ほどをおりかけていた大男が、切れた豆のつるをつかんだまま、大きなからだのおもみで、ずしんと、それこそ地びたが、めりこむような音を立てて、落ちてきました。そして、それなり、目をまわして死んでしまいました。

ちようどそのとき、いつぞや、はじめてジャックにあつて、道をおしえてくれた妖女が、こんどはまるでちがつて、目のさめるように美しい女の人の姿になつて、またそこへ出て来ました。きらびやかに品のいい貴婦人きふじんのような身なりをして、白い杖を手にもつていました。杖のあたまには、純金じゆんきんのくじやくを、とまらせていました。そしてふしぎな豆が、ジャックの手にはいるようになったのも、ジャックをためすために、自分をはからつてしたことだといつて、

「あ のとき、豆のはしごをみて、すぐとそのまま、どこまでものぼつて行こうという気をおこしたのが、そもそもジャックの運のひらけるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり、ふしぎだなあとおもつてながめたなり、すぎてしまえば、とりかえつこした牝牛めうしは、よし手にもどることがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらすなければならぬ。だから、豆の木のはしごをのぼつたのが、とりもなおさず、幸運のはしごをの

ぼったわけなのだよ。」

と、こう妖女は、いいきかせて、ジャックにも、ジャックのおかあさんにもわかれて、かえって行きました。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャックと豆の木

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>